

水辺劇場都市にいがたフォーラム 勉強会

・信濃川周辺の体感温度測定

私たちは、平成20年の新潟市内各箇所の温度等を調査したまちの体温測定、平成25年10月19日に開催した「水辺劇場都市にいがたフォーラムPart1」など、新潟市の50年後の賑わいあるまちづくりを目指した「水辺劇場都市」とすべく、新潟工科大学富永研究室とともに、環境側面からアプローチした各種取り組みを行っています。

この一環として、平成26年4月から6月にかけて各種専門家や活動家をお招きして開催した勉強会、人が感じる気温を見える化するために実施した「信濃川周辺の体感温度測定」があります。

この勉強会の結果と体感温度測定を次頁以降にお知らせします。

水辺劇場都市にいがたフォーラム 勉強会

勉強会Part1

日時:4月25日(金) 16時~17時30分

場所:新潟市市民活動支援センター 研修室

講師:新潟市歴史博物館(みなとぴあ) 伊藤副館長

目的:信濃川下流部の歴史的変遷を把握し、これからのまちづくりに反映すべき事項を把握する。



勉強会Part2

日時:5月23日(金) 16時30分~18時30分

場所:新潟市市民活動支援センター 研修室

講師:日本工業大学 成田教授(都市環境工学)

目的:風の道等に配慮した各種事例を紹介してもらい、そこから、これからの検討に向けた視点を確認する。



経歴:東京都港区 環境影響調査審査会・委員(2005年4月~現在)、埼玉県 ヒートアイランド対策技術検討委員会・委員長(2006年3月~現在)、環境省 ヒートアイランド現象の実態把握および対策手法に関する調査検討会・委員(2006年10月~現在)

勉強会Part3

日時:6月20日(金) 16時~17時30分

場所:新潟市市民活動支援センター 研修室

講師:NPO法人堀割再生まちづくり新潟 川上理事長

目的:堀を再生したいという現在の取り組みから、これからの新潟市ではどのように取り組むべきか(機能、整備方法など)について意見交換する。



水辺劇場都市にいがたフォーラム 勉強会のまとめ

	第1回勉強会	第2回勉強会	第3回勉強会
開催日	平成26年4月25日	平成26年5月23日	平成26年6月20日
講師	みなとぴあ 伊藤副館長	日本工業大学 成田教授	NPO法人堀割再生まちづくり新潟 川上理事長
主な点	<p>①新潟の夏は朝・夕に風がぱったりと止まり、蒸す。冬になると北風が吹いて電線が鳴る。</p> <p>②信濃川の変遷とともに、新潟の地形が形成された（川とまちはセット）。</p> <p>③信濃川を港として使っていたが、土砂の堆積により大型船は入港できず、佐渡で経由で運ばれることもある。</p> <p>④新潟の農園の村々は全て潟や川で繋がっていた。野菜、薪、材木等を船で運んだ（発達した舟運）。</p> <p>⑤新潟は商人のまち。流通場所に近い信濃川沿いを中心にまちが繁栄した。商業の機会を均等に与えるため、港に面していなくても平等さが得られるように堀を作った。（開発目的でもあった）</p> <p>⑥信濃川は飲料水であり、漁業（さけ）の場でもあった。</p> <p>⑦信濃川は交通機能だけでなく、船遊びの場でもあった。ボートレースなど。</p> <p>⑧信濃川は日常茶飯事に浸水していたと思われる。</p> <p>⑨柳都大橋が出来たことにより港湾として再認識されてきた（橋の上から河口側を見る風景ができた）。</p> <p>新潟の港の景観は帆柱が並んでいる様子</p>	<p>①風の道はマラソンではなく駅伝である。海から二次元的に連続的に流入するわけではなく、建物の配置等による上空風の流入など、三次元的な影響もある。</p> <p>②二次元的に川を風の道として設けても、それほど内陸部までは運べるわけでない。また、その場合は相応の規模の河川でないと困難。</p> <p>③風の道だけで地域全体で相応の効果を期待するのは無理。</p> <p>④緑や水面が連続する場所のみに注目するのではなく、風通し、日差しを遮る木陰の配置、建物配置など、都市全体で総合的に考えたほうが良い。</p>	<p>①新潟にあった堀は、他の観光地と比べると、ひけをとらない景観であった。貯水機能も持っていた。</p> <p>②新潟には全国的に誇れる芸妓文化がある。</p> <p>③今年、竣工した早川堀は、堀と言える規模ではないが市民の取り組みを通じて形に繋がった事業である。</p> <p>④堀割再生の取り組みは、20世紀の終わりからスタートした勉強会が始まりである。</p> <p>⑤この会の目的は、堀を掘ることは目的ではなく手段であり、楽しいまちにしたいということが目的である。</p> <p>⑥大和跡地は、市役所機能の移転が言われているが、あくまでも新潟の文化を発信できる場にする必要がある。（人と触れ合えるような文化の発信拠点であるべき）</p> <p>⑦今風の安っぽく作る施設ではなく、都市の顔と言えるような施設（例えば、銀座和光）のある町が古町であるべき。</p>
今後の反映事項	<p>信濃川あっての新潟である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・信濃川を中心に新潟は形成された。 ・信濃川付近は交流の場であった。 <p>→まちの中心（もの、人、お金集まる場所）</p> <p>↓</p> <p>新潟の風景をつくっていた</p>	<p>風の道で対応する（できる）場所、緑を設ける場所など、温熱環境の改善が図れる各種対応を適切に組み合わせながら計画する。</p>	<p>外に発信できる資源の創出（有機的な磨き上げ）が必要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・信濃川は交流の場であるとともに、まちの異なり（古町地区と万代地区）を示す施設でもある。 ・まちの質向上（快適さ、文化的価値など）に繋がる信濃川の活用

信濃川周辺の体感温度測定

実測日：平成26年7月30日(水) 天候：晴れ(最高気温：33.7℃)

調査範囲：八千代橋から萬代橋の間

調査内容：

(1) 体感温度測定(調査時間 12:00～19:00)

① 定点観測

[機器] 気象ステーション、[測定項目] 気温、湿度、日射量、風向、風速

② 移動観測

[機器] 体感温度測定用カート、[測定項目] 気温、湿度、グローブ温度など

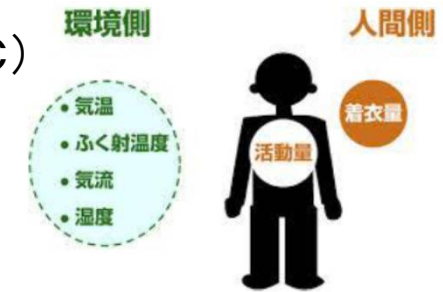


図1 体感温度を決定する要素



気象ステーション



測定カート

(2) 歩行者・自転車交通量調査(調査時間 11:00～19:00)

[調査場所] 左・右岸時間帯